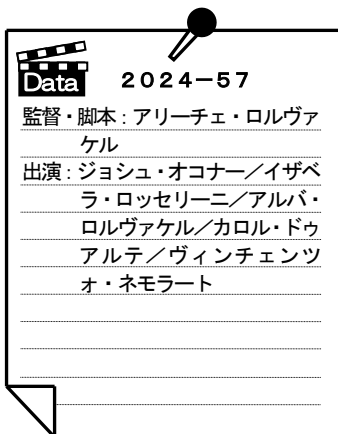




👁️👁️ みどころ

あなたは、イタリアのトスカーナ地方を知ってる？B.C. 750～500 年頃、トスカーナ州を中心として栄えたエトルリア文化を知ってる？また、トスカーナ州出身のアリーチェ・ロルヴァケル監督を知ってる？多くの日本人は知らないだろうが、『夏をゆく人々』(14 年)、『シネマ 36』217 頁)や『幸福なラザロ』(18 年)、『シネマ 45』149 頁)を見た人なら誰でも、この女性監督特有の問題意識とその幻想的なストーリー構成、脚本作りに関心を抱くはずだ。

そんなアリーチェ・ロルヴァケル監督にとって、原題を『La Chimera』(＝幻想)とした本作を発表したのが当然なら、「私が育った地域では隠された財宝の発掘や謎めいた冒険の話をよく耳にした」と語る彼女にとって身近な存在である墓泥棒を映画の素材としたのも当然！他方、「失われた女神」はギリシャ神話の「オルフェウスとエウリュディケ」にインスパイアされたそうだから、本作の鑑賞についてはその基礎的学習が不可欠だ。

本作の鑑賞については、弁護士の理屈や論理構成の整合性を求めてはダメ。あくまで『La Chimera』(＝幻想)という原題を尊重し、邦題を『墓泥棒と失われた女神』とした、わかったようでわからない、わからないようでわかったようなストーリー展開の面白さをしっかり味わいたい。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

■□■この奇妙な邦題に注目！墓泥棒ってナニ？原題は？■□■

私は『夏をゆく人々』(14 年)、『シネマ 36』217 頁)と『幸福なラザロ』(18 年)、『シネマ 45』149 頁)を観て、はじめてイタリアのトスカーナ州出身の女性監督、アリーチェ・ロルヴァケルの名前を知った。ドイツ人の父親とイタリア人の母親を持つ 1981 年生まれの彼女は、トリノとポルトガルのリスボンで学び、劇場での作曲や編集の仕事を経た後、映

画に惹かれてドキュメンタリーの編集者として働きはじめたそう。

彼女の長編第2作にして、第67回カンヌ国際映画祭グランプリを受賞した作品が『夏をゆく人々』、そして、第71回カンヌ国際映画祭脚本賞を受賞したのが、長編第3作目の『幸福なラザロ』だから、すごい。また、イタリアのトスカーナ州といえば、『サイドウェイ』(04年)、『シネマ7』(212頁) で見たアメリカのカリフォルニア州のワイナリーと同じようにワインで有名だが、B.C.750～500年のイタリアには、トスカーナ州を中心として栄えたエトルリア文化があったことを、私は『夏をゆく人々』を見てはじめて知った。その詳細は同作の評論を読んでもらいたい、トスカーナ出身のアリーチェ・ロルヴァケル監督にとって、そんなエトルリア文化は映画のネタとして最適らしい。なぜなら、日本では縄文文化や弥生文化の遺跡を掘り出すのは大変だが、イタリアのトスカーナ地方はエトルリア文化の埋蔵品の宝庫なのだから。そのため、同監督が育った地域では、隠された財宝の発掘や謎めいた冒険の話をよく耳にしたそう。なるほど、なるほど。そんなアリーチェ・ロルヴァケル監督が生まれ育ったトスカーナ地方では、世界一治安の良い日本とは違って、墓泥棒も身近な存在だったらしい。そのため、本作の邦題に「墓泥棒」というキーワードが登場したわけだが、もう1つの「失われた女神」とは一体ナニ？ また、本作の原題「Chimera (キメラ)」とは“幻想”のことだが、なぜ本作はそんな原題に？

■□■この監督の問題意識に注目！「失われた女神」とは？■□■

アリーチェ・ロルヴァケル監督は本作のパンフレットに収録されている『DIRECTOR'S COMMENT』で、前述の「私が育った地域では、隠された財宝の発掘や謎めいた冒険の話をよく耳にした。」という言葉に続いて、「夜遅くまでバーにいたり田舎の宿に立ち寄りしたりするだけで、トラクターでヴィラノヴァ人の墓を発見したとか、ある晩ネクロポリス(多数の墓によって形成された古代の墓地)のそばを掘っていたら家の周りを囲めるほど長い金のネックレスを発見したとか、そんな話を聞くことができた。あるいは庭で見つけたエトルリアの壺を売ってスイスで大金持ちになった人もいた。」と述べ、さらに「私にとって大切な「過去とは、ただ過ぎ去った時代でしかないのか？」という問いについて探求する地元地域を舞台にした三部作(『夏をゆく人々』と『幸福なラザロ』に続く)の最後の作品であろう。ある墓泥棒が言うように、我々の世界では死者が「生」を与えるのだ。」と述べている。なるほど、なるほど。

縄文文化や弥生文化の古代遺跡や奈良時代、飛鳥時代の遺跡をこよなく愛する日本の“ある種の人々”の中には、同監督と同じような感覚を持つ人があるかもしれないが、上記のコメントを読めば、同監督にとってトスカーナ地方のエトルリア文化がいかに身近なものであったか、そのため墓泥棒にも抵抗感がない上、キメラ(幻想)について膨らませる様々な想像力がいかに大きいものであったかがよくわかる。

そんな本作につけられたもう1つの邦題である「失われた女神」とは、ギリシャ神話で有名な「オルフェウスとエウリュディケ」に登場する、毒蛇に噛まれて亡くなった妻エウ

リュディケをモチーフとしたものだが、吟遊詩人で豎琴の名手だった夫のオルフェウスはなぜ女神（＝妻のエウリュディケ）を失ってしまったの？

■夢の世界から現実へ！冒頭は山田洋次の演出と同じ！■

日本人なら誰でも山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズが大好きだ。同作は50作も続いたから、渥美清演じる「フーテンの寅さん」と共演する美人女優が複数回になる他、夢の世界で始まる冒頭のシーンから、突然目覚めて現実に戻る手法も複数回になっていた。まさかアリーチェ・ロルヴァケル監督がそんな山田洋次監督の手法を真似たわけではないだろうが、本作の冒頭シーンは、燦々と降り注ぐ太陽の下、こちら見つめている女性がいる。「君なのか、俺が失った女性の顔は」と言い、彼女の頬に手を添える男。本作冒頭のそんなシーンは、列車に乗った男アーサー（ジョシュ・オコナー）が、車掌から声をかけられて目を覚ますことになるから、山田洋次監督の演出と同じだ。

もっとも、大きく違うのは、『男はつらいよ』シリーズの冒頭で寅さんが見る夢はたわいもない「武勇伝」が多いのに対し、本作でアーサーが見ている夢は幻想じみていること。その後のストーリー展開を見ていると、①アーサーは「スパルタコ」（アルバ・ロルヴァケル）が裏で手を回したことによって刑務所から出所できたことがわかるものの、第1にアーサーと墓泥棒たちとの関係、第2にアーサーと失われた女神や3人の女たちとの関係は、わかったようでわからないし、わからないようでわかったような、摩訶不思議なストーリーだから、十分注視しながら鑑賞したい。ここに言う3人の女たちとは、①家主で元歌手のフローラ夫人（イザベラ・ロッセリーニ）、②その愛娘のベニアミーナ、そして③歌のレッスンをする代わりにフローラの身の回りの世話や家のメンテナンスをしている住み込みの弟子イタリア（カロール・ドゥアルテ）の3人だが、アーサーは寅さんのようにすぐに女に惚れ込むタイプの男ではなく、どこまでもキメラ（幻想）を求めていくタイプの男のようだから、寅さん流の恋模様の展開にならないところが本作の難しさだ。

ちなみに、パンフレットのストーリー紹介によると、「イギリス人のアーサーはイタリア語を話せるものの完璧ではない。イタリアが「イタリア語を教えましょうか？」と提案すると「君が？」と返すアーサー。イタリア自身もイタリア語が母語ではない。」とのことだが、私たち日本人にそんな言葉のアヤがさっぱりわからないのは当然だ。

■この男の特殊能力は墓泥棒に不可欠！お宝がザクザクと■

私が小学生の頃に家の幻灯機で観た『アリババと40人の盗賊』では、「開けゴマ」という呪文を唱えると、アララ不思議、閉じられていた洞窟の扉が開いたが、アーサーはそれと同じような特殊な“ある能力”を持っているらしい。それは、木の枝を使ったダウジング能力。Wikipediaによると、ダウジング（Dowsing）とは「地下水や貴金属の鉱脈など隠れた物を、棒や振り子などの装置の動きによって発見できると謳う手法。」で、「用具にはペンデュラム・ダウジング（振り子）、ロッド・ダウジング（L字形・Y字形の棒）などの種類がある」そうだ。つまり、木の枝でダウジングをしながら一帯を調べると、木の枝

が指し示す先にお宝が眠っているというものだ。なるほど、そんな特殊能力を持っているため、スパルタコはアーサーを刑務所から出所させた上、墓泥棒の一味がアーサーに「あなたに仕事の話がある。お宝がザクザクだ」と声をかけてきたわけだ。

しかし、そんなバカな！誰がどう考えても、スクリーン上でアーサーが見せるダウジングによって、古代の墓を探り当てるなんてことは信じられないが、そこは原題を『La Chimera』とした本作のこと。私を含む多くの観客が見事にアリーチェ・ロルヴァケル監督の演出に取り込まれていくから、面白い。

■□■盗掘品のオークション風景からまさかの展開が次々と！■□■

去る 7 月 13 日に 20 年ぶりに 4K デジタルリマスター版で鑑賞した『オペラ座の怪人』(04 年)の冒頭は、オークション風景から始まった。そこでオークションの対象として出品された商品は猿のオルゴール人形の他、かつて豪華絢爛だったオペラ座の天井を飾っていた巨大なシャンデリアだったが、それは一体なぜ？

それと同じように(?)、本作中盤では、墓泥棒たちが掘り出した埋蔵品を持ち込んだ“スパルタコ動物病院”におけるオークション風景が登場する。つまり、このスパルタコ動物病院の“裏家業”は、盗掘品の売買だということだ。そんなストーリーを見ていると、なるほど、なるほどと理解できるのだが、原題を『La Chimera』とする本作は、そこから「先生が何かを感じたぞ！」と一心不乱にある場所を掘り起こす墓泥棒たちの姿になるので、ビックリ！夜の町でひとしきりダンスと酒を楽しみ大騒ぎした後、海岸にやってきたアーサーがダウジング作業に入り、「先生が何かを感じたぞ！」と墓泥棒たちが騒ぎ始めると、物語は再び、わかったようでわからない、わからないようでわかったような「キメラの世界」に入っていくので、それに注目！

アーサーのダウジングに従って墓泥棒たちが掘り起こした場所には、なんと手付かずの密閉された空間があったからすごい。さらに、そこには動物の像や見事な壁画、そして美しい女神像まであったから更にビックリ！アリーチェ・ロルヴァケル監督が公言するように、いくらイタリアのトスカナ地方がエトルリア文化の宝庫だとしても、アーサーのダウジングによって本当にこんなお宝にたどり着くの？そんな夢みtainな世界が本当にあるの？誰でもそう思うはずだが、本作を見ていると、否が応でもそんな幻想の世界にのめり込んでいくことに。

■□■なぜ？女神像の頭部を切断！船上でのオークションは？■□■

アーサーの先導で入っていった地下道はかなりの大きさだし、そこで発見した美しい女神像はそれは見事なもの。つまりここは、ただの墓ではなく、聖堂のような場所だったわけだ。ところが、美しい女神像に見とれるアーサーを尻目に、仲間たちは突然女神像の首と胴体を切り離してしまっただから、アーサーはもちろん私たち観客もビックリ！「なんてことを！」怒ったアーサーは仲間に掴みかかったものの、その時パトカーのサイレン音が鳴ったから、さあ大変。さあ、その後のドタバタ劇は・・・？

映画のパンフレットにはストーリー紹介があるが、普通それは大筋を紹介しただけのもの。特に「ネタバレ」厳禁の作品は、ごく短くまとめている。ところが、本作のストーリー紹介は、4 ページに渡って多くの写真と共に詳しく紹介されている。それは、よほど感受性の鋭い人は別として、普通の感性だけでは、本作の映像を見ただけで容易にそのストーリーを読み解くことができないためだ。前述のように、私もわかったようでわからない、わからないようでわかったような本作の「幻想の物語」を摩訶不思議な気持ちで鑑賞していたが、本作ラストに向けてのストーリーは船上で行っている美術品のオークション風景になってくるので、それに注目！

そこではじめてスパルタコが女性だったということがわかるのだが、船上でオークションを仕切っているスパルタコが、「これはエトルニアの大地母神。彼女こそが動物たちの女神です。頭部の欠損以外は完璧な保存状態。その価値は計り知れません。でも私たちは今日—その価値を測りに集まりました。」と売り込むのに対して、墓泥棒たちは裏で“直接取引”を持ち掛けていくから、両者の立場の違いは明白だ。そのため、スクリーン上は両者のギリギリの歪み合いの風景になる。その姿を見てその場で立ち尽くしていたのが、女神像の第 1 発見者で、切り離された頭部を大切に袋の中に持っていたアーサー。そのアーサーが袋から女神像の頭部を取り出し、その顔を見つめた後、「人の目を喜ばせるためじゃない」とぼつりと呟くと、頭部を海の中へ放り投げてしまったからビックリ！「何をしやる！」と叫ぶ一同の前で、女神像の頭部はゆっくりと海底に沈んでいってしまうことに……。一体この物語はどんな風に収束していくの・・・？

■□■本作はどんな結末に？“失われた女神”との再会は？■□■

何度も言うように、本作はわかったようでわからない、わからないようでわかったような物語が続いていくから、いつどのような形で結末を迎えるのかもさっぱり分らない。もっとも、スパルタコの船上オークションにおける、頭部だけが欠損した美しい女神像の取引を巡るスパルタコと墓泥棒たちとの対立と、そこで起きるあっと驚くアーサーの行動が本作のハイライトになることは明かだ。

そう思っていると、スクリーン上は再び列車の中で通路に立つアーサーの姿が映し出され、車掌の男とのやりとりが……。そんなシーンはある程度予測できたが、その後のアーサーがイタリアと彼女の 2 人の子供たちと出会うシーンは全く予測がつかないものだ。イタリアは「駅を占拠したの。誰のものでもないし・・・みんなのもの。ここは一時的な居場所よ。人生も一時的だしね。」と言った後、アーサーに対して「ここに一緒に住めば？」と提案したからビックリ！さらに夜、みんなで食事を済ました後、談笑するアーサーとイタリアがその後唇を重ね合わせたから、さらにビックリ！アレレ、ここから「フーテンの寅さん」流の恋愛劇がはじまるの？まさか、まさか……。そう思っていると、やはりそうはならず、原題の『La Chimera』（＝幻想）通りの摩訶不思議な結末になっていくので、その興味深い展開はあなた自身の目でしっかりと！

2024（令和 6）年 8 月 2 日記